

# 自閉症を中心とした重複学級の教育実践

— 重複学級と本校の10年の取り組みと今後の課題 —

小泉浩一 池尻加奈子 伊東久美子 井上剛 大伴潔 湯山孝司 小金井俊夫  
齋藤大地 蓮香美園 松本直巳 宮坂美帆子 吉田友紀 安永啓司

## I はじめに

重複学級は本学の大学改革委員会の提案を受け平成16年4月に設置された。本校が知的障害養護学校としての永年の実績があることや、自閉症児への教育に対する社会的な要請を勘案して、自閉症を中心とする重複学級を試行することになった。設置された当時、東京都では既に「自閉症学級」を設置している先駆的な小金井養護学校や中野養護学校があり、平成16年度には国立久里浜養護学校が自閉症に特化した筑波大学附属久里浜養護学校として改組され、また、大規模校である都立の養護学校でも、1学年に少なくとも1学級の自閉症学級が設置される計画が進んでいた。

そのため本校では、「自閉症学校」や「大規模校での自閉症学級」とは異なった、新しいモデル「特別支援教室の機能を持たせた自閉症を中心とする重複学級」として、教育実践に取り組んできた。平成16年の重複学級の設置から、平成25年度で10年を迎えた。そこで、本報告では、重複学級と本校の10年の取り組みを検証し、「特別支援教室の機能を持たせた自閉症を中心とする重複学級」の今後の課題について考察することを目的とする。

## II 重複学級の教育

### 1. 重複学級の学級編成と基本方針

重複学級は小学部に設置された。小学部は児童の定員が18名で、低学年学級（1年生から3年生）、重複学級、高学年（4年生から6年生）の三学級で編成した。重複学級対象の児童については、知的障害と自閉症を有する児童を中心とし学年は問わないこととした。

重複学級の基本方針としては、以下の4つの方針が掲げられた。【表1】

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 一人ひとりの教育課程を編成して指導する。</li><li>② 教育課程・教育活動について重複学級（空組）と低学年学級（星組）・高学年学級（海組）の交流を双方向にする。</li><li>② 音楽以外は、指導法として行動分析を応用する。</li><li>③ 教室の物理的配置や教材を視覚的に構造化する。</li></ul> |
|---|

【表1】 重複学級の基本方針

### 2. 特別支援教室の特徴を持った重複学級システムの構築

重複学級には特別支援教室の機能を持たせることにした。その際特別支援教室のシステムを【表2】に示す内容で検討・実践した。

- |  |
|--|
| <p>1) 週時表の工夫と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童一人一人に応じた週時表の設定</li> <li>・重複学級と他の学級との交流の授業</li> </ul> <p>2) 小学部教員合体によるケース会議の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部教員 相談部教員 大学教員を含めたケース会議の実施</li> </ul> <p>3) 行動分析や環境の構造化を取り入れた授業の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「分かりやすい環境」「分かりやすい課題」の準備</li> <li>・それらによる「課題の明確化」と保護者との「課題の共有化」</li> </ul> |
|--|

【表 2】 特別支援教室の機能を持たせた重複学級のシステム

### Ⅲ 重複学級と本校の取り組み

2004年から2013年の10年間に重複学級に在籍した児童は12名であった。そのうち2名は高等部を卒業し地域の福祉機関に就職し、1名が他校に転校、9名が本校の中学部と高等部に在籍している。それぞれに福祉機関や学校で作業や学習に日々取り組んでいる。

#### 1. 学級編成

【表 3】は重複学級設置以降の小学部の学級編成である。重複学級では一人ひとりの教育課程による個別指導が展開できるように、児童一人に対する教員の割合が他学級に比べて高くなるようにしてきた。

※数字は児童数 ( ) 内の数字は重複学級担当教員数

学級	年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
低学年学級		7	6	6	6	5	6	6	7	7	7
重複学級		3 (2)	4 (3)	3 (3)	4 (3)	5 (2)	5 (3)	5 (3)	4 (2)	3 (2)	4 (2)
高学年学級		7	6	6	7	6	5	5	5	8	7
小学部児童数		17	16	15	17	16	16	16	16	18	18

【表 3】 10年間の小学部の学級編成

#### 2. 実際の取り組み

重複学級と本校の10年間の取り組みを【表 4】に示す。重複学校については基本方針に沿った取り組みを示した。本校の取り組みについては自閉症児を含めた授業実践研究を小学部と全校に分けて示した。

##### 1) 重複学級を中心とした取り組み

###### (1) 重複学級のシステムの導入

2004年と2005年には児童数3~4名に対して3名の教員が配属した。一人ひとりの教育課程(週時定表)をつくり【表 5】、児童1名に対して教員1名が指導した。教室には児童が自主的に活動に取り組めるように構造化され【図 1】、各スペースには児童のコミュニケーションモードに合わせた文字・絵・写真などを掲示して視覚支援を行った【図 2】。

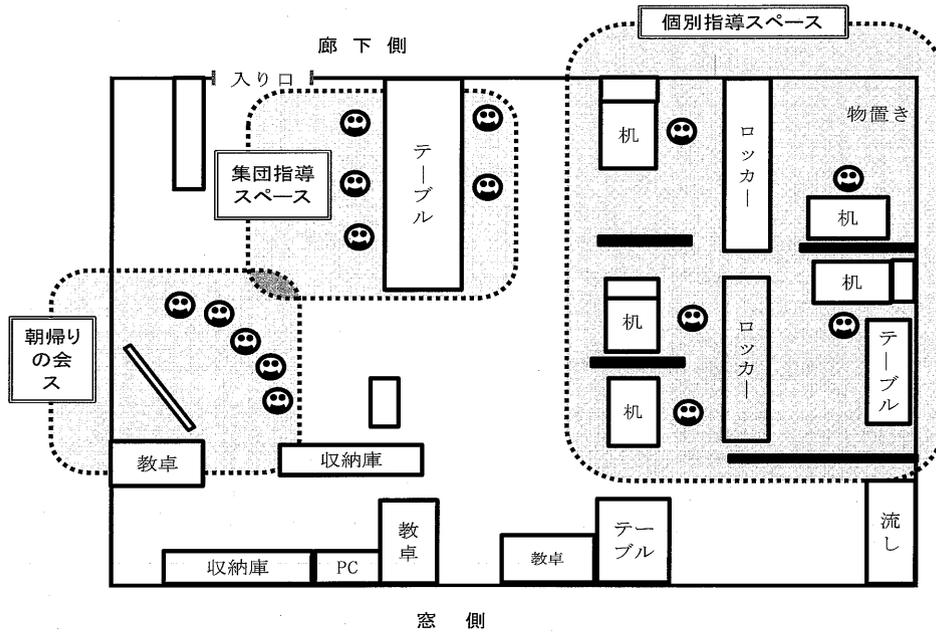
	重複学級					研究テーマ	
	児童	一人ひとりの教育課程	交流による授業	行動分析の応用	構造化・視覚支援	小学部	全校
2004 平成 16年	3名 男① ④⑥	<b>一人ひとりの教育課程</b> ・個別の週時定表による授業実践	・個別に他学級の授業参加 ・他学級児の個別指導	・入浴指導 ・歩行指導	<b>構造化と視覚支援</b> ・教室環境 ・ワークシステム ・文字・絵・シンボル等での提示	<b>自閉症を中心とした重複学級のシステムづくり(全校)</b> ・小学部に重複学級を設置し、授業実践を開始	
2005 平成 17年	4名 男① ①⑥ 女⑤			・偏食指導	・マラソンの目標と周回数 ・ロッカー荷物と収納場所	<b>自閉症のある児童・生徒への授業実践(全校)</b> ・自閉症のある幼児・児童・生徒の授業実践研究(幼稚園・小学部・中学部・高等部)	
2006 平成 18年	5名 男② ③⑥ 女① ⑤	<b>学級の週時定表による指導 —個別指導と集団指導—</b>	・他学級との合同授業	・行動観察アセスメント ・チェックリストの活用	・個別の日課表 ・数量の提示 ・教室内の活動場所	・ワーキンググループによる自閉症のある授業実践(コミュニケーション引き継ぎシートの活用) 担任と授業担当間・進学時の学部間 進級時の学級間	
2007 平成 19年	4名 男① ③④ 女②		・学部全体授業に参加(合同集会・みんなであくしゅ) ・低学年学級との授業(おはなしであそぼう) ・高学年学級との授業(つたえよう他)	・教室からの逸脱する行動の支援 ・活動量の提示 ・脱構造化を図る対人スキル指導 ・手順のルーチン化 ・食事、遊びや活動の要求 ・動作開始を促す指導 ・校内移動の自立に向けて		・ワーキンググループによる自閉症のある授業実践 自閉症児同士の交互唱の指導 児童同志のかかわりを促進する授業 ソーシャルストーリーの活用 自閉症児の会話に向けた指導 成人自閉症児の演劇活動の支援	
2008 平成 20年	5名 男① ②④ 女③	<b>双方向交流の授業システム</b>	・低学年学級と重複学級の交流による授業(お話であそぼう) ・重複学級と高学年学級の交流による授業(つたえよう)	・着替え ・排泄 ・業間移動	・雑巾がけの目標と達成回数 ・係り活動の手順	<b>子どもたちのコミュニケーションの充実をめざした授業づくり(小学部)</b> ・双方向の交流による授業実践研究 ①低学年と重複学級の交流による授業 ②重複学級と高学年学級の交流による授業	
2009 平成 21年	5名 男① ②③ ⑤ 女④	<b>他学級の集団生活での指導</b> <b>中学部の集団生活への移行支援</b>	★1年次より重複学級に在籍した年児童が高学年学級に移行			・学部全体のコミュニケーションの授業実践研究 全児童を対象とした音楽を媒介として児童相互のかかわりを促進させる授業(みんなであくしゅ)	
2010 平成 22年	5名 男① ②③ ④⑤		・他学級との校内宿泊学習 ・他学級との校外宿泊学習			・教科学習におけるコミュニケーション支援の授業実践研究 ①低学年学級「音楽」 ②重複学級「国語：自閉症児のサイン指導」 ③高学年学級「国語(お話であそぼう)」	
2011 平成 23年	4名 男② ③④ ⑤		・高学年学級に参加 ①5年生：終日の生活(週1回) ②4年生：「国語・算数」の授業(週2回)			<b>子どもたちの言語活動の充実をめざした授業づくり(小学部)</b> ・言語発達とコミュニケーションに応じた授業実践研究 ①自閉症児を含む高学年児童集団の「国語・算数」 ②自閉症児のコミュニケーション手段(絵カード交換方式とサイン・言語)に対応した個別指導	
2012 平成 24年	3名 男① ③④		★1年次より重複学級に在籍した5・6年児童が高学年学級に移行 ・高学年学級に参加(3・4年生 週1日終日) ・高学年学級児童個別指導(偏食指導、国語・算数)			・読み書きの発達と実行機能の視点を加味したコミュニケーション支援の授業実践研究 ①言語活動の包括的なアセスメントツールの開発 ②自閉症児と他障害のある児童が在籍する低学年学級の授業(こくご・さんすう)	
2013 平成 25年	4名 男① ②④ ⑤		・高学年学級集団に参加 4・5年生：週1回終日および「国語・算数」の授業			<b>児童期の人間関係を育む全員参加型授業(小学部) —友人・仲間関係を中心として—</b> ・高学年の重複学級と高学年学級児童による、子ども同士でのコミュニケーションやかかわりを育む授業実践研究(つたえよう)	

※児童欄にある○数字は児童の学年を表している。

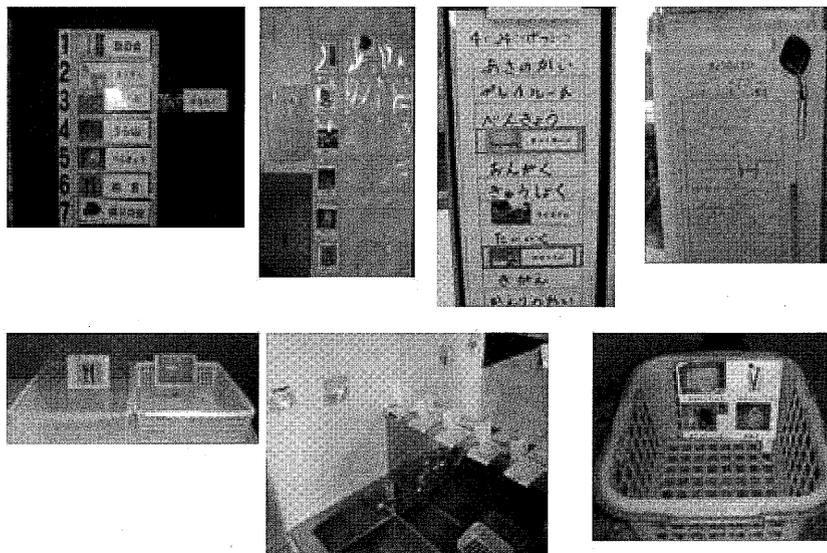
【表4】重複学級と本校の10年間の取り組み

	星組					A児					C児					B児					海組				
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
8:50	生活																								
9:00	生活																								
10	朝の会																								
20	朝の会																								
30	朝の会																								
40	朝の会																								
50	朝の会																								
10:00	朝の会																								
10	朝の会																								
20	朝の会																								
30	朝の会																								
40	朝の会																								
50	朝の会																								
11:00	朝の会																								
10	朝の会																								
20	朝の会																								
30	朝の会																								
40	朝の会																								
50	朝の会																								
12:00	朝の会																								

【表5】一人ひとりの教育課程（週時表 2004）



【図1】教室環境の構造化（2006）

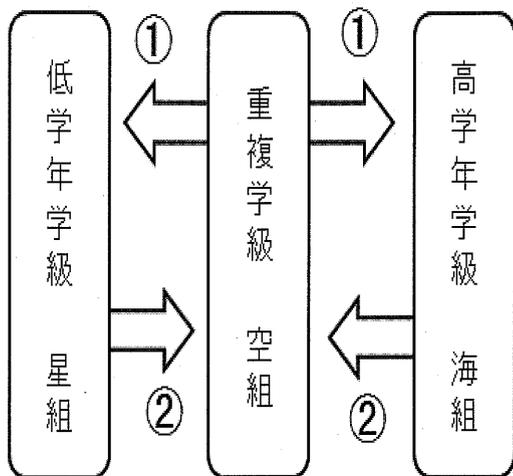


【図2】文字・絵・写真などによる視覚支援

(2) 双方向の交流による授業のシステム

重複学級の児童に社会性の向上が見られるようになったことから、2006年には一人ひとり教育課程（週時程表）から学級としての週時程表による授業を行うようになり、授業によって個別指導や集団指導の指導形態が取られるようになった【表 6】。さらに、他の学級の授業に重複学級の児童が参加していく試みも行われた。

2007年には、重複学級の高学年児童と高学年学級の交流による授業「つたえよう」、重複学級の低学年児童と低学年学級 3 年生の交流による授業「お話であそぼう」を開始した。2008年には、低学年学級、重複学級、高学年学級が交流する双方向交流の授業システム【図 3】が小学部全体の教育に位置づけられた【表 6】。その他、「みんなであくしゅ」といった重複学級も合わせた小学部の児童全員を対象としたコミュニケーション支援の授業も行うようになった。



※①は重複学級児童が低・高学年学級の授業に参加する。  
 ※②は低・高学年学級児童が重複学級の授業に参加する。

【図 3】双方向交流の授業システム

	月	火	水	木	金
8:40	生活				
9:10	朝の会				
9:30	マラソン / ② 個別抽出指導				
10:00	そだてよう (集団指導)	① でかけよう (交流授業)	国語・算数 (個別指導)	図工 (集団指導)	国語・算数 (個別指導)
10:40	休み時間				
11:00	調理 (集団指導)	① でかけよう (交流授業)	みんなであくしゅ (学部全体)	音楽 (集団指導)	体育 (学部低高学年別指導)
12:00	給食・昼休み・② 個別抽出指導				
13:20	① つたえよう ② お話であそぼう (交流授業)	生活	学級 (集団指導)	生活	そうじ (集団指導)
14:00		帰りの会		帰りの会	
14:30	生活	生活	生活	生活	生活
14:30	帰りの会	帰りの会	帰りの会	帰りの会	帰りの会

※①②は双方向交流による授業である。( )は指導形態である。

【表 6】重複学級の週時表 (2012)

(3) 集団生活への移行支援

重複学級の児童たちは学級間の交流による授業や学部全体の授業にも主体的に参加できる様子が見られるようになった。そのために、重複学級で身近生活やコミュニケーション等の個人スキルを獲得した児童を高学年学級に移行し、その後高学年学級の集団生活から中学部の集団生活に移行していくという支援を 2009 年から開始した。2011年には重複学級から高学年学級への移行支援と、高学年学級から中学部への移行支援を小学部の教育に位置づけた。

2) 学部や全校による取り組み

重複学級が設置された翌年 2005 年から大学教員を含めたワーキンググループをつくり、「自閉症のある児童・生徒への授業実践」を研究テーマとして取り組んだ。各部の授業実践にとどまらず、学級や学部間の引き継ぎや、児童同士の歌唱や関わりの促進、会話、演劇指導などの実践が行われた。

小学部では 2008 年から、自閉症児を含めた児童全員を対象としたコミュニケーションの充実をめざした授業実践研究に取り組んだ。そこでは、前述した重複学級と低・高学年学級の双方向交流による授業、音楽を媒介とした全児童による「みんなであくしゅ」や教科について、コミュニケーションを視点とした授業づくりが行われた。2011 年からは、言語活動（言語発達

やコミュニケーションモード、読み書き、実行機能)のアセスメントツールを開発して、自閉症児を含めた全児童を対象とした授業実践研究に取り組んだ。そこでは、児童のコミュニケーションモードに応じた、絵カード交換方式やサイン、音声言語の個別指導や児童集団の言語発達や読み書きの発達に応じた「国語・算数」の授業づくりが行われた。2013年には、自閉症児を含めた高学年の児童集団を対象とし、相手のコミュニケーション手段(音声言語、文字言語、サイン、絵カードの交換)を用いて児童同士がやりとりをして関わりを促す、ICTを活用した授業づくりが行われた。

## IV まとめと今後の課題

### 1. 重複学級を中心とした取り組み

重複学級での自閉症児への教育は、一人ひとりに教育課程(週時程表)を計画してからの指導実践からはじまった。児童は環境の構造化や視覚支援が個々に応じて用意されることにより、自ら生活や学習に取り組むようになった。その後、児童同士の関わりや集団の中で学習していく環境が必要になってきたことから、一人ひとりの週時表ではなく、学級の週時程表を使い、個別指導と集団指導の形態による指導が行われるようになった。その後、集団指導による学習は学級間、学部全体による交流による授業実践が行われようになり、重複学級設置当時の基本方針による教育が2008年に実現された。

交流による授業は小学部の教育システムとして定着し、重複学級の児童は教師や他学級の児童とのやりとりやかかわりを持ちながら、授業や生活に自然に参加できるようになった。その後、自閉症児への教育は集団・社会生活への参加をめざした支援へと進み、高学年学級や中学部の集団生活へ移行するという教育の形がこの10年間でできあがった。

今後の課題は学級編成と教育課程においてあげられる。小学部の学級編成は三学級を基本としている。そのために、低学年学級と重複学級から進級してくる児童を高学年学級で受け入れることになり、高学年学級の児童数が増えることになり、児童期の学級集団としては規模が大きくなる、高学年学級の在籍児童数は今後の課題である。また、教育課程については、中学部以降の集団・社会生活で求められる力を分析し、小学部の指導内容として児童の成長に即して段階的に教育課程へ位置づけることが課題である。

### 2. 学部や全校による取り組み

重複学級設置後、自閉症がある子どもたちの授業実践が全校の研究テーマとして取りあげられ、各部からその成果が報告された。2008年以降は自閉症といった文言を全面に出した授業実践研究ではなく、それぞれの学部で障害特性や個々の発達に応じた授業実践研究が行われるようになった。今後は学部間の教育内容の連続性を勘案しながら、自閉症を含めた子どもたちの発達と卒業後の生活に向けた一貫性のある教育課程を全校で構築していくことが課題である。

## V 引用参考文献

- ・文部科学省(2001) 21世紀の特殊教育の在り方(最終報告)
- ・内閣府(2002) 障害者基本計画
- ・文部科学省(2003) 今後の特別支援教育の在り方(最終報告)
- ・中央教育審議会(2004) 特別支援教育を推進するための制度の在り方について(中間報告)
- ・東京学芸大学教育学部附属養護学校研究紀要 No. 49(2004) - No. 58(2012)